

粗飼料であるから、如何に飽食したからと

酪農の指針

関東地方平坦地の畠作を主とする酪農

(埼玉県の例)

吉水

續

他里いも等の蔬菜を作付し、桑園の内外には青刈りの飼料作物を主として作付している。

の発育を期待できないので、必ず補助飼料を給与しなければならず、補助飼料は、ラデノクロバーそのものが多汁質であり、しかも比較的多量に摂取されるので、少量でも栄養価の高い蛋白質と澱粉質飼料を適宜配合して与えるのである。農家では自給で

きる玉蜀黍、麩、米糊を「如二如」の割合で配合し、これに大豆粕か魚粉を極く少量加えて（加えなくてもよい）給与すれば良好な

加えて、このように自給性を高めることが、計画養豚への第一歩である。またラデノクロパーと馬鈴薯あるいは甘藷を併用すれば、更に濃厚飼料を節約しうる効果が大である。

肉豚の場合は、生後七ヶ月を過ぎたら、次第に草の給与量を減らし、濃厚飼料を增量して行き、薯サイレージを配した飼料で『飼い直し』をして、良質の肉を造る肥育方法をとることが良く、『飼い直し』をするところから、言方つきが急激によくなり

とによって、脂肪の蓄積が増加する。体重が増加して非常に有利である。

の面でも刮目に値するものがあり、特に経費を節減するのに画期的な役割を果すものである。また、牧草地を造成することは自給飼料の確立、飼料の計画へ一歩前進することであり、牧草の利用こそ、養豚界が一大旋風を巻き起すものであることを信ず

(雪印上野幌育種場在勤)

関東地方は水田が比較的少く、
とし、甘藷、麦作と養蚕を主とする經營である。
る。とくに大里郡はその經營の「モデル」
的な地方である。こうした穀菽、甘藷、蚕
地帯に乳牛を入れ、酪農經營をなし、そ
の経済効果がどうなるかを知ることは、当然
方として酪農を始めんとする農家はいうま
でもなく、既存酪農家の經營改善に資する
ため、清水氏の經營の大要を述べよう。

埼玉県大里郡寄居町字用土
清水氏の経

わが国の酪農経営の現状は、誠に不安定にして、このままにして推移せんか、折角農業経営の革新のために発足した酪農も危機にひんすることを心配せざるを得ない状態である。

然し望ましい酪農経営の規模もまた地帯と個々の条件によりはなはだしく異なるのであるが、その地帯において将来かくあるべしと推奨したい経営の生きた実例を紹介して酪農経営の改善に資したい。

していたが、終戦後は漸次和牛に切り換へられ、現在は酪農の奨励により、その和牛が乳牛に切りかえられ、乳牛の役利用と動力耕耘機を利用して耕作をする方向に向つてゐる。

牧草及び青刈飼料には専用の仓库を有する。
施用している。

家畜頭数は次の通りである
乳牛二五〇頭、和牛二八〇頭、馬三〇頭
豚三〇〇頭、綿羊四〇頭、鶏二〇〇〇羽
なお養蚕は各農家が三〇グラム以上を掃

(6) 犬牛 がんのくひと高粱を種一頭
普通登録四頭、目下の乳量約三十石

き立てているのが普通である。
(3) 耕作の状況

「デノクロバー」「イタリアンライグラス」(桐園の草生栽培)として「ラデノクロバー」と「オーチャード」の混播、その他畑作の大部 分に短期生育の青刈飼料、根菜類の作付を主とす。

その他野菜を栽培している。畑作は大麦、小麦、裸麦、菜種、大豆の実取作物を栽培するほか甘藷を必ず三反歩くらい作付し、少くとも一反以上桑園をもつてているのが普通である。名媛辰巳は日暮作ノソング、春

別取餌料付付の基準は既てて言語をかへ
年間を通じての自給作付を実施している。
飼料給与は九月下旬の一日の飼料給与と状
況は次の通りである。(六頭分)
甘藷蔓一二〇貫(九月下旬、十月上旬付)

通である。西農家は日本で最も多く栽培される穀物 炙夷麦、ライ麦、ヘーフチ、大麦、レープなどを栽培し畑作にも同様の作物の他、デンントコーン、カブと甘藷の栽培面積が大きい。

甘諸の掘りとり中である。
その他牧草及び青刈飼料若干と甘諸六貫
大豆粕一斗二升、麩二斗、焼酎粕四斗、食
塩、カルシウム(適量)

(1) 耕作面積 水田六反四畝歩、畑一町
(2) 三反歩 (内桑園五反歩)
耕地の利用状況

なお、冬期飼料として、牧草「サイレージ」のほか、甘藷を「サイレージ」として多量に製造している。これは当地方の最も特色とするところである。購入飼料代は

裏作 水田の三分の一は二年生草栽培で、やつて牧草を栽培し、他は実取り麦作及び菜種。

三 生産の概況

(2) 家畜頭數

当地方は戦前耕作には主として馬を利用

貫、甘諸千五百貫、馬鈴薯八百貫、桐苗千本、コンニヤク玉五俵。

○養蚕

春蚕五〇貫、夏蚕一五貫、晚蚕二〇貫、残葉は販売（蚕の掃立が少いから桑園五反歩ではあまるから）

○畜産

牛乳約一五〇石、仔六頭。

以上の生産で、収入は百五十万円以上と推定される。

四 清水氏の經營を通じて推奨したい点

以上の經營内容だけで判断することはきわめて困難であるが、同氏の語るところから推定し、また同氏が力を入れている經營の重点を参考したい。

(一) 水田裏作を三分の一輪換作として牧草すなわち「レッドクロバー」と「イタリアンライ」の混播等を行つて水田の若返りと、地力の増進をかね飼料の生産を図つていること。

(二) 牧草の作付が多いこと

前記の通り水田の輪換作を始め、桑園の間作はいうまでもなく、畑の大部分に豆科の牧草と禾本科牧草、とくに短年牧草として「イタリアンライ」の混播等を行つて水田の若返りと、地力の増進をかね飼料の生産を図つていること。

その他年間を通じて、別表の通りの青刈飼料作付規準を定め、年間の飼料計画をたててていること。

(三) 乳牛の飼育頭数が多く、かつ全部能力が優れ、いざれも健康で受胎率一〇〇%、毎年仔牛を生産していることである。本年は六頭を生産している。すなわち約一町歩の全耕地で、養蚕（収穫量八十五貫）とい

う季節的に多くの労力を要する經營をやつしていく、搾乳牛六頭を飼育する酪農家はなかなか稀れであると思う。もちろん養蚕漸減の方針。

つまり能力の優れた乳牛六頭を飼育し、いずれも健康でその中でも基礎牝牛は十歳を越えた牛と聞く。要約すると稲作に執着の多い日本農家として、水田の三分の一を輪換作に切り替えを断行し前記の通り桑園の間作を始め、飼料作物の作付が多く、その作付が合理的で、きわめて集約で土地の利用が高いことである。

(四) 自給肥料の生産の多いこと

乳牛六頭を有するため、年間二万貫以上の厩肥生産と、年間百石の尿の生産により、一作五百貫以上の厩肥を施し、地力を増進しているから、飼料の集約作付ができ、予期以上の収量をあげ飼料の自給ができるのである。

(五) 施設が完備していること

年々の仔牛の生産収入と牛乳収入により、毎年設備が改良され、牛舎を始め堆肥會及び尿溜が完備し、動力耕耘機と「ミルカ」を有し、労力を節約している。

(六) 桐を栽培していること

牧草の被陰樹として桐を（反当三十本くらい）栽培して牧草の乾燥を防ぐと共に、堆肥及び牛尿の施用により、桐の生育を速進し一般は十カ年で販売用に供される生長量のものが、七年くらいで同程度に生長、その良質のものは、一本一万円くらいに売れるとのことである。

気候の暖い地方にて、夏太陽の直射がきびしくて乾燥する地方では、牧草のためにも良好ではないかと思われる。もちろん年間堆肥、尿等を相当多量に施用する必要がある。桐の栽培は容易であるから、堆肥

厩肥、尿が増産される酪農と桐は興味ある經營である。

以上は清水氏の經營を通じて、推奨すべき点である。

| 作物名 | 反播種量 | 當量 | 播种期 | | | | | | | | | | | |
|------------|-------|----|-----|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|
| | | | 1月 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| カブ | 0.6~1 | 立 | | | | | | | | ○ | ○ | | | |
| レーブ | 0.6~1 | | | | | | | | | ○ | ○ | | | |
| 青刈燕麦 | 12~14 | | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | ○ | | |
| 同ライ麦 | 12~14 | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | |
| 同大麦 | 12~14 | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | |
| ケンタッキー31 | 約1 | | | | | | | | | | | | | |
| オーチャード | 3~4 | | | | | | | | | | | | | |
| イタリアンライグラス | 約2 | | | | | | | | | ○ | ○ | | | |
| 青刈トモロコシ | 14~16 | | ○ | | | | | | | | | | | |
| スターリングラス | 4~6 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | |
| 赤クロバー | 1~2 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| ラデノクロバー | 0.6~1 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| レンケ | 1~2 | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | |
| ベックチ | 5~6 | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | |
| 青刈大豆 | 3~4 | | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | |
| 同ソラ豆 | 20~25 | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | |
| 同豌豆 | 12~14 | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | |
| 甘諸ツル | | | | | | | | | | | | | | |
| 大根葉 | 0.6~1 | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | |

| 反当收量 | 飼料成分 100 分中 | | | | | | | | | | | | | |
|------|---------------|------------|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|-------|-------|-------|-------|
| | 可消化蛋白 | 澱粉 | 粗纖維 | 粗蛋白 | 粗脂肪 | 粗灰分 | 粗粗纖維 | 粗粗蛋白 | 粗粗脂肪 | 粗粗灰分 | 粗粗粗纖維 | 粗粗粗蛋白 | 粗粗粗脂肪 | 粗粗粗灰分 |
| 3~8 | 1.7 0.4(粗) | 9.1 6.5 | | | | | | | | | | | | |
| 3~8 | 1.4 | 6.5 | | | | | | | | | | | | |
| 2~8 | 1.5 | 10.3 | | | | | | | | | | | | |
| 2~8 | 1.8(粗) | 11.4 | | | | | | | | | | | | |
| 2~6 | 1.5 | 9.6 | | | | | | | | | | | | |
| 4~8 | | | | | | | | | | | | | | |
| 4~6 | 0.9 | 11.4 | | | | | | | | | | | | |
| 3~5 | 2.0(粗) | 11.4 | | | | | | | | | | | | |
| 3~7 | 0.6 | 9.1 | | | | | | | | | | | | |
| 4~15 | (乾)4.3(粗) | 3.7 | | | | | | | | | | | | |
| 5~15 | 1.7 | 10.2 | | | | | | | | | | | | |
| 5~10 | 1.7 | 10.2 | | | | | | | | | | | | |
| 3~8 | 2.0 | 7.9 | | | | | | | | | | | | |
| 3~6 | 1.8(粗) | 9.7 | | | | | | | | | | | | |
| 2~6 | 2.1 | 11.0 | | | | | | | | | | | | |
| 3~4 | 1.5 | 7.1 | | | | | | | | | | | | |
| 3~4 | 1.7 | 7.9 | | | | | | | | | | | | |
| 1~5 | 0.5 | 4.8 | | | | | | | | | | | | |
| 1~3 | 0.9 | 6.4 | | | | | | | | | | | | |

(凡例) ○……○播种期、◎播种最適期、—生育期、—收穫期

註 本組合の区域が埼玉、群馬の二県にまたがり、畑地帯、水田地帯、山間部等広範囲に涉るため、飼料作物の選定、栽培法等一様ならざるため、本表は本部を中心として表記してあるから、参考として各自の土地に適した作物並びに播种期、栽培法等研究する事が緊急である。特に播种期は收穫への最大要因をなすから、最良なる適期を発見することを必要とする。飼料作物は年間断続なく青刈が給与でき得るよう組合せて作付けすること。初夏の生育旺盛期には敏速に収納（エンシレージ若しくは乾草とす）次期作への回転を早める可とす。